

## アレルギー・リウマチ科

### 1. スタッフ（平成24年4月1日現在）

科長（教授）	箕田 清次
副科長（准教授）	岩本 雅弘
外来医長（学内講師）	釜田 康行
病棟医長（講師）	長嶋 孝夫
医員（講師）	永谷 勝也
医員（教授）	岡崎 仁昭
	吉尾 卓
病院助教	松本 和子
シニアレジデント	5名

### 2. 診療科の特徴

当科の診療科名を平成12年4月1日をもってアレルギー膠原病科からアレルギー・リウマチ科へと変更した。これにともないリウマチ患者の紹介数が増加している。

当科はアレルギー・リウマチ・その他の膠原病を専門にはするものの、同時に全身の管理能力も必要とされる。膠原病そのものがその疾患の特質上、多臓器に病変がおよぶこと、および中心となる治療法が免疫を抑制することから合併症として日和見感染をはじめとする感染症を引き起こす頻度が高いことが理由である。この全身管理能力は当科の最大の特徴であり、故にただ単に膠原病の診療にとどまらない。専門性にとどまらない全身管理能力の習得という点は内科医としてもっとも重要なことであり、最大の武器でもある。この点はレジデント教育において、当科がもっとも力を注いでいるものでもある。

欧米に比べ約7年の遅れに甘んじていた我が国のリウマチ治療が、利用できる生物学的製剤の増加とともにいまや欧米なみとなった。現在までに当科で導入した生物学的製剤使用患者数は平成23年末の段階でレミケード348例、エンブレル290例、ヒュミラ104例、アクテムラ124例、オレンシア19例の885例に及ぶ。その80%以上の患者で非常に満足できる治療効果が得られており、これらの治療を受けた栃木県内の患者の約40%に当科が関係している。地域医療に大きく貢献していると自負している。さらには臨床治験にも開発段階から積極的に関わり、より多くの治療困難症例のQOL改善に貢献した。

生物学的製剤による関節リウマチの治療には以前にも増して多くのマンパワーと時間を必要とする。生物学的製剤による治療を当科で多くの患者に実施できているのは県内各所の診療所との病診連携のたまものである。患者の紹介を受け、初期治療を当科が中心になって行い、安定した段階で連携施設での治療へ移行する。しかし、

大学附属病院の役割は緊急事態に備えることでもあることから当科でも数ヶ月に一度程度ではあるが併診を継続している。そのことで患者は診療所と大学という利便性と安全性の両面を確保できている。患者にも十分納得が得られ、また少ないマンパワーの当科においても、治療困難な重症例に注力することができた。

ジュニアレジデント教育に関しても力を注いでおり、他の内科では行っていない外来研修を取り入れている。新患をまずジュニアレジデントが診察し、患者の問題点、鑑別診断、検査計画などを短時間に把握させ、その後、教授が教育（precept）しながら患者を診察する方法である。入院患者の場合はすでに診断が下されている症例が多く、短時間に患者の有するさまざまな問題点を把握するという訓練を行うチャンスが少ないことを補う目的である。

平均在院日数の低減は昨年と同程度の達成率を得ることができており、長期にわたる入院でしばしば遭遇するQOLの低下を防ぐことができています。リウマチ膠原病は一般的には平均在院日数が多い診療科である。当科の平均在院日数である14～15日は全国レベルでも最も少ないレベルである。また、DPC分類の「全身性臓器障害を伴う自己免疫疾患」の入院患者数は北海道大学、九州大学に続いて全国で第3位である。この3大学の置かれている地理条件（人口密度）を勘案すると、驚異的な順位であると判断される。

#### ・認定施設

日本リウマチ学会教育施設  
日本アレルギー学会教育施設

#### ・認定医

総合内科専門医

箕田 清次  
岡崎 仁昭  
岩本 雅弘  
長嶋 孝夫

アレルギー学会指導医

岡崎 仁昭  
吉尾 卓

アレルギー学会専門医

箕田 清次  
岡崎 仁昭  
吉尾 卓  
長嶋 孝夫

リウマチ学会指導医

箕田 清次  
吉尾 卓  
岩本 雅弘  
長嶋 孝夫

リウマチ学会専門医	簗田 清次	側頭動脈生検	1件
	他5名	神経生検	1件
		後腹膜腫瘍生検	1件

### 3. 診療実績・クリニカルインディケーター

#### 1) 新来患者数・再来患者数・紹介率

新来患者数	728人
再来患者数	13,458人
紹介率	68.8%

#### 2) 入院患者数(病名別)

関節リウマチ	189人
全身性エリテマトーデス	68人
シェーグレン症候群	25人
強皮症・CREST症候群	26人
多発性筋炎・皮膚筋炎	37人
血管炎症候群	32人
混合性結合組織病	17人
成人Still病	11人
ベーチェット病	6人
リウマチ性多発筋痛症	12人
アレルギー疾患	6人
その他	45人
総数:	435人(重複あり)

#### 3) 手術症例病名別件数

なし

#### 4) 治療成績

#### 5) 合併症例

ICU入室症例	3人
肝生検後出血	1人
緊急入院率	120人/435人(27.6%)

#### 6) 死亡症例・死因・剖検数・剖検率

間質性肺炎	1人
ニューモシスチス肺炎	1人
敗血症	1人
肝不全	1人
原疾患(強皮症)	2人
外泊中突然死	1人
合計7人	(剖検0人、剖検率0%)

#### 7) 主な検査・処置・治療件数

(他科依頼含む)

腎生検(4例後腹膜下)	12件
皮膚生検	24件
筋生検	9件
口唇生検	5件
肝生検	2件

#### 8) カンファランス症例

##### (1) 診療科内

1月6日	血栓症を反復する高γグロブリン血症
4月14日	高尿酸血症を来たす疾患
4月14日	強皮症腎クリーゼ
6月9日	中枢神経サルコイドーシス
9月1日	視力障害を来たしたWegener肉芽腫症
9月28日	再発性多発軟骨炎の生物学的製剤治療
10月6日	ステロイド使用後の甲状腺機能低下症
10月6日	PAIgG高値(9000以上)のRA

##### (2) 獨協医大アレルギー内科との合同カンファレンス

6月7日	骨生検で診断した非結核性抗酸菌症の1例
10月25日	インフリキシマブ投与中に左側胸膜炎と末梢血好酸球増多を呈した1例

##### (3) 整形外科との合同カンファレンス

12月7日	2010年関節リウマチ新分類基準
-------	------------------

##### (4) 病棟看護師との合同カンファレンス

(病棟連絡会) 隔月で行った。

1月24日
3月28日
5月23日
7月25日
9月26日
11月18日

### 4. 事業計画・来年度の目標

レジデント教育の更なる充実と若いリウマチ医の育成が喫緊の課題である。

また、リウマチ患者教育をさらに発展させるため市民講座を繰り返し開催すること、患者友の会とより緊密な連携を行うことなどを引き続き目標とする。